

1 受賞団体・個人の名称

あいがもかぞくふるののうじょう

合鴨家族古野農場(福岡県桂川町)

(問い合わせ先)

TEL 090-9604-9266



(経歴)

1976年(昭和51年)、大学卒業後に就農、有機農業の取組み開始。

1988年(昭和63年)、故置田敏雄から「合鴨除草法」を伝授され、同年から水田に合鴨の雛を放した。その後、試行錯誤の末に「合鴨水稲同時作」として理念と技術を確認する。

1992年(平成4年)、鹿児島大学萬田正治教授(当時)とともに「全国合鴨水稲会」を発足させ、この活動を通じて国内への普及から、世界へ普及活動を行っている。

2012年(平成24年)にはフランスで開催された「第1回有機稲作世界会議」へ招かれるなど、有機農業の普及啓発に幅広く活躍している。

(受賞時の経営内容)

米(合鴨水稲同時作)7ha、野菜類・小麦等2ha、自然卵養鶏300羽、鴨1400羽、合鴨雛3000羽、漬物・味噌、餅、合鴨燻製等の農産加工品 等

2 生産面の取組

①土作りは堆肥、緑肥で行っている。

堆肥はモミガラ、アイガモの糞、鶏糞、人糞、米ぬか、バウムフードを発酵させて使用している。

緑肥はカラスノエンドウ、レンゲ、菜の花等を利用している。

追肥は圧縮搾りの油粕、グアノ、米ぬか、山土、バウムフード、澱粉をまぜて発酵させて有機肥料を作り施用している。



②防除については、水田輪作により、雑草、害虫、病気の発生を防いでいる。

アイガモを水田に放すことにより雑草、害虫の発生を防いでいる。

病気は栽植密度を低くすることで防いでいる。(稲は30×27cm。トマト、なすは100×150cm。)

③有機農業に適した種苗として、トマトは“禅光”という

近くの園芸店が開発した品種で青枯れ病に強く降雨時に劣化が少ない品種を栽培し、他にも病気や害虫に強く味の良い品種を使用している。



3 経営面の取組

①水田は7ha、野菜は2ha、販売はほとんど消費者への直接販売を行っている。

②生産量は米10a当たり400kg～500kg、他に野菜を多品種栽培している。

③販売価格は36年間一定で変動がなく、玄米1kg500円、大根1本100円である。この価格がコストに反映しているかどうかは不明であるが、これで35年間生活し、子供5人を大学まで行かせているため収支バランスがとれている証である。

④販路の工夫は、年間契約による販売、近隣の消費者に直に米や旬の野菜・加工品を届ける「提携」である。

4 取組の成果

①合鴨水稲同時作については、1988年に「合鴨除草法」からスタートしたが、雛が野犬に襲われることを電気柵で囲むことによりより解決し、現在は、合鴨による除草のみでなく、合鴨料理、合鴨による水田の生態系の保全等へと発展している。

②氏の有機農業の基本姿勢は、「多様性と循環」であり、限られた耕地の中で可能な限り多くの作物を生産することを目指して、「同時作」と「輪作」、「循環」を実践している。

③合鴨水稲同時作の技術を確認され、その技術は国内や海外に広がっており、他に例のない取組をされている。

5 地域社会への貢献

①月1回の有機農業講座、アイガモ料理教室、漬物キムチ教室、味噌造り教室などを開催している。

②学校や社会人を対象とした講演会に招かれるなど、食育・環境教育や農業理解への活動に参加している。地域の中学生の職場体験を受け入れたり、幼稚園児にアイガモ雛の放鳥をさせ、幼稚園の給食に野菜を納入している。

③地域の用排水路維持管理には率先して参加している。

④稲単作地帯の中で水田輪作の野菜とアイガモの風景は第一級の景観を形成していることから、多くの人を招いている。